

を描いている。広い廊下の両脇はカーテンで仕切れ、患者たちのベッドが並んでいる。とても悲しげな室内である。病室こそ、居心地の良い室内にするべきだろう。精神科医の中井久夫は、室内の重要性についてたびたび記述している。

「病棟の力には非常に大きなものがあると思います。エスキロール（注：19世紀フランスの精神医学者）の時代から、病棟は最大唯一の治療道具であるといわれています」（『徴候・記憶・外傷』）

何もない殺風景な部屋に暮らすのは、独房や悲しげな病室暮らしのようで暗澹たる気分になる。古い小屋に入れたマウスに発癌剤を打つと必ず癌になったのだが、新しい小屋に入れたマウスは、癌にならなかったという事例も中井は紹介している。

バリアフリーの部屋といった考え方以前に、わたしたちにとって、部屋そのものが大きな影響を与えているらしいということだ。さらにいえば、室内だけではなく、わたしたちが生活しているあらゆる環境のデザインが、結局、わたしたちの身体や気分になんらかの影響を与えているはずだ。

●対抗文化の遺産

ところで、六〇年代末から七〇年代にかけて、いわゆる「対抗文化」（注：Counter Culture 既存の文化や体制を否定し、それに敵対する文化）が広がった時代に、わたしたちの生活をいかにするかという問いかけをもった出版物がアメリカで次々に刊行された。社会的に弱い立場にある人々に目をむけたものが少なくなかった。

『新しい女性の生き残り資料集』（The New Women's Survival Sourcebook）なども、そうした志向からつくられた出版物だった。社会的に弱い立場にある女性がいかに生き残るかが語られている。たとえば、「ライセンスなしの健康管理実践」といったことが語られている。医療の免許がなくても自己の健康管理はできるはずだという視点だ。この文章は、医学が男性の特権として扱われてきたという歴史的経緯を批判的に語っている。

「女性の身体内部の明白さや単純さは、医学の専門家によって、……複雑な領域にされてしまいました。病院では高額な費用が必要になり、屈辱的でしばしばサディステックな扱いをされ、投薬と外科手術がなされます。……政治的に抜け目のないやり方で、男性たちは、……女性を医学から排除したのです」と記述している。つまり、女性の単純な身体と生理を複雑に捉

え、医学的に女性自らが手出しできないようにしてきたのだという。その状況を打ち破ったのは、女性が自身の身体に目をむけたことによる。女性達が自分自身の身体を知ることにより自分の身体を管理できるようになったのだという。

こうしたことは、やがて身体や健康といったことにかぎらず、自らの生活環境全般を、自分たちで自ら見直すという意識を生み出した対抗文化の特徴を見ることが出来る。そうした対抗文化が生み出した視点は、その後、女性をはじめとして社会的に弱い立場にあった人々のためのデザインのさまざまな提案を生み出したといえる。

アトランタやシカゴなどのアメリカの都市部におけるホームレスを対象としたプロジェクト「マッド・ハウザー・ハット」という仮設小屋供給プロジェクトにも、そうした視点をみることが出来る。日本の仮設住宅のようにまとまった土地に効率的に並んだ住まいを作るのではなく、いらない廃材を使い個人用の小屋を空いている様々な場所に建てていったのだ。



マッド・ハウザー・ハット (DESIGN FOR THE OTHER 90%より)

こうしたデザインが語られてから、すでに数十年ほど経た現在、弱い立場にいる人々のためのデザインという概念が日本では、希薄になっているかもしれない。国全体が「強さ」ばかりを主張している現在、「弱さ」への視点こそが重要であるように思える。